

琵琶湖・淀川水系を利用して運ばれた家形石棺



鴨稲荷山古墳の家形石棺(昭和61年の出土状況)

権力の象徴、家形石棺

古墳時代（3世紀半ば～7世紀頃）の日本列島各地には、数十万基ともいわれる古墳が造られます。鍵穴の形をした前方後円墳や素焼きで作られた人物埴輪など、特徴的な遺跡や出土品が多く見られるのが、この時代の特色です。中でも、重量が数トンにもおよび巨石をくり抜いて造られる6世紀の家形石棺（※蓋石が屋根形の家形石棺）と呼ばれる埋葬施設の造営には、亀裂のない良質な石材の確保

とその加工、船や修羅（※運搬用の木製大型ソリ）による運搬、古墳への設置など、多くの時間と労力が費やされています。

当時のヤマト王権が所在する畿内では、400基ほどの家形石棺が確認されていますが、その多くは、熊本県阿蘇・ピノク石、奈良県二上山白石、兵庫県竜山石が用いられています。畿内を中心とする支配者がこぞって、この石材を取り入れていたことが判明しています。

水運利用で運ばれた家形石棺

高島市は、畿外に位置し、石材の産地からも遠く離れていますが、奈良県二上山から産出された白色凝灰岩製の刳抜式家形石棺を安置する「鴨稲荷山古墳」が存在します。

二上山からの移動距離は、100km以上におよぶことから、鴨稲荷山古墳の被葬者は、在地の有力者の枠を超えた、ヤマト王権に近い人物像が

想定されています。

日本書紀などには、「高島郡三尾別業」出生の継体大王は、淀川左岸の「樟葉宮」（現枚方市付近）で即位した後、木津川左岸の「筒城宮」（現京田辺市付近）、桂川右岸の「弟国宮」（現長岡京市付近）と、約20年間にわたって、淀川水系に「宮」を営んだことが記載されています。

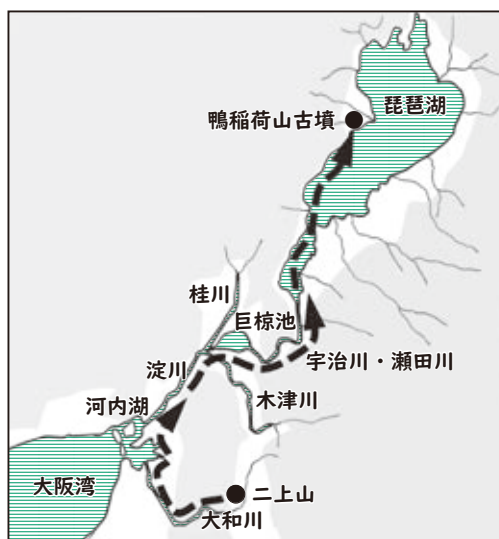
琵琶湖・淀川水系のルート

二上山から切り出された鴨稲荷山古墳の家形石棺は、船を利用してながら、大和川、河内湖を経て淀

川に入り、巨椋池、宇治川・瀬田川を経由しながら、琵琶湖西岸を北上するルートで高島に運ばれたとされています。

当時の継体大王の支配基盤であった淀川水系と琵琶湖を利用しながら運ばれた鴨稲荷山古墳の家形石棺は、当時の高島がヤマト王権にとって、継体大王の出生地であると共に、畿内と北陸・日本海を結ぶ交通路、琵琶湖水運の掌握などで、重要な地であったことを、約1500年を経た今日に伝えています。

図文化財課 ☎(25)8559



石棺が運ばれたルート図

編集感

雨の日は掃除など、家での作業を進めるのに絶好の機会！年末の大掃除から半年、6月にも大掃除ができると次の年末が楽になりそうですね。

最近は、リサイクルショップなどを手軽に活用でき、ゴミとして捨ててしまう不用品は少なくなった気がします。それでも出てしまった不用品は捨てる前に、特集1を今一度確認してみてください！

リサイクルできるものが紛れていたりと、新たな工夫が見つかったりと、今よりごみ袋がスリムになるかもしれません☆(Y・H)



広報たかしま

令和2年

6

月号

No.245

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒590-1502 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎0740(25)8000(代)

http://www.city.takashima.lg.jp
t:info@city.takashima.lg.jp